

+ 5 8 【えいれい】

そのころ、懐爺がこう述懐をしたことがありました。

「むかしから、金太郎さん桃太郎さんにかぎらず、鬼や怪物退治の、いろいろな英雄がもてはやされてきましたが、はたしてかれらは本当に英雄なんでしょうかねえ」

ぼくはぼくらしくなく、長く考えてから、こういいました。

「そら、えいゆうじゃ。そういうひとを、えいゆうというんじゃからのう。けんど、えいゆうが、おにやかいぶつより、えらくてりっぱ、ということは、ないのじゃ」

「金ちゃん、それは、どういうことでしょう」

懐爺は懐爺らしくなく、かたい表情で、ぼくにききました。

こんどは、ぼくはほとんど考える必要もなく、こういいました。

「どうもこうも、あたりまえじゃ。おたがい、たたかうんじゃからな。おたがい、そうじゃ、かいじいのつかうことばでいうと、おなじく(じげん)のものなんじゃ。だから、どっちがえらくて、どっちがりっぱ、なんてこたあ、ないのじゃ」

「そうですか。ということとは、もし英雄が立派なら、英雄に退治されたおばけも立派、というわけですね。共に闘った次元の存在として」

「ほんまは、そんなむずかしいことじゃのうて、わしにとっては、おばけもえいゆうも、すきなだけじゃ。ただ、おばけたいじのえいゆうを、おばけよりもえらい、ということにはせんがええのう」

「英雄の意味するところを、変えたほうがいいというわけですか。それならまず辞書の内容を変えなければ」

「じしょなんて、どうでもええ。おもてむきのことじゃからのう。こないだのせんそうなんて、がいこくはみんなおばけで、がいこくじんをたいじする、にほんのへいたいはえいゆう、ということじゃろ。そういうこというやつは、せんそうに、どっちがえらい、どっちがりっぱなんてこたあ、あるわけねえつつうことをしらん、おおばかものじゃのう」

「英雄もおばけも平等、外国人も日本人も平等、というわけですね。それは、金ちゃんが、おばけとつきあうなかでつちかった、思想というか結論ですね」

「そうじゃねえ。かいじいとのつきあいで、つちかったんじゃ。わしはつちかったなんて、いみはわからんがのう。わしにとって、かいじいはえいゆうじゃが、それは、おぼけをたいじするからじゃ。けんど、おぼけをたいじするかいじいは、おぼけとおなじ〈じげん〉なんじゃ。だから、わしがかいじいをえらいとおもっとるんは、えいゆうだからじゃのうて、わしのしりたいこと、なんでもしっとるからで、だからだいすきなんじゃ」

このぼくの台詞が効いたらしく、懐爺の目に涙が浮かんでいました。

「ところで金ちゃんは、英雄のおぼけをごぞんじですか」

落ちついてから懐爺がききました。

「しらいでか。むらのみんながいうとる。せんそうでしんだ、へいたいじゃ。【えいれい】いうとる。【えいれい】の〈れい〉は、ゆうれいの〈れい〉じゃろ」

「たしかに英霊の霊は幽霊の霊ですが、英霊をおぼけだなんていうと、叱られますよ」

「だれがしかるんじゃ」

「それはその、まずは英霊の親族にですよ。例えばですよ、自分の兄弟が戦争で亡くなって、おぼけになったといわれたら、不愉快でしょうから」

「わからんのう。おぼけは、ふゆかいなんか。わしにとっては、ゆかいじゃがのう」

ぼくは不愉快でした。

「金ちゃんは特別であって、特別ではない普通の人びとは、金ちゃんとは違うんです」

「そうかい。【えいれい】がもしおぼけじゃないなら、わしにはかんけいないのう」

「そんな冷たいことをいってはいけません。わたしたちに関係のない人間なんていません。ましてや、わたしたちの国の人々が戦争で亡くなっているんですから、おおいに関係があるんですよ」

懐爺は優しい目をむけていました。

ぼくはわるいことをいってしまったと反省しました。

それでもぼくの口からでてきた言葉は、反省のそれではありませんでした。

「かいじい、よくきけ。わしは【えいれい】がおばけじゃないのなら、【えいれい】にきょうみはない、といたいんじゃ。【えいれい】にたいして、つめたいきもちなんか、あるわけないぞ。せんそうでしんだひとは、へいたいであっても、へいたいじゃなくても、みんなあわれなのじゃからのう。だがのう、かいじい、よくきけ。もしも、【えいれい】がおばけなら、おばけになってでてくるんじゃったら、おお、おおあわれじゃ。その、おおあわれの【えいれい】なら、わしにとっては、おおいにかんけいありなのじゃ。あいつもこいつも、かんけいあるなんて、ごまかしじゃ」

「恐れ入りました。金ちゃんは【えいれい】を、どうしてもおばけにしたいという口ぶりですねえ」

懐爺はちっとも恐れ入ってない口ぶりでした。

「かいじいこそ、ほんまはおばけの【えいれい】を、おばけじゃなくしたいみたいじゃのう」

「わたしにいわせれば【えいれい】は、おばけとかおばけでないとか、そういうことをいう対象ではないんですよ。金ちゃんにはいままでいていませんでしたが、【えいれい】のなかに、わたしの遠い親戚や年少の友達が何人もいますんでねえ」

「それは、すまんだったのう。けんど、わたしにいわせればじゃ、【えいれい】をとくべつあつかいするんは、【えいれい】にたいして、ぎゃくにしつれいじゃないのかのう」

まだまだ話は続きました。

とっぷりと日が暮れて、懐爺とぼくの大きな声が、辺りに響いていました。

たぶんその声につられて、茂みのなかから、醜い蝦蟇（がま）がやってきました。

「蝦蟇君がきましたね。彼はわたしの夜の友達です。金ちゃん、どうぞよろしく」

ぼくはやきもちをやいて、黙ったまま帰ったのでした。